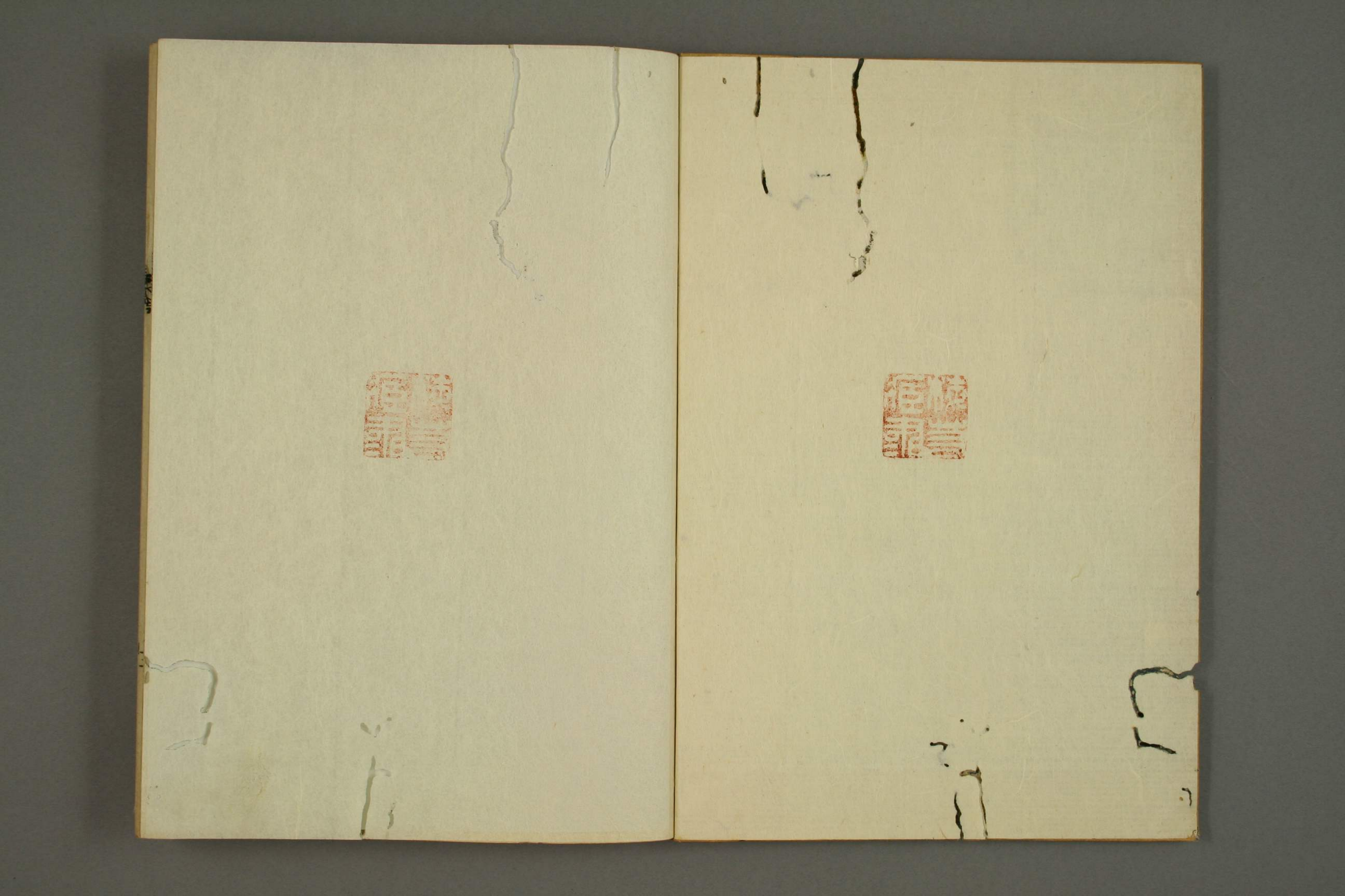
姨捨

特別
チ12
3643
13 (3)



第二　嫉妬

月代のなりきりあり
嫉妬　かゝ様なる作者を
ばかりなる侍ばかり
更科の月をたゞ秋思
立嫉妬　洗濯のたゞ
指屋のかゝ　たゞ立つゝ中

故梅若誠太郎氏
昭和五年十月吉日
梅若重戸氏
寄贈

月し音て行方よ尋ぞらよ
行方受科や捨捨ちよ
拝も我姨棄山よ来てこられば
つらにて萬里も隔なく
里よ陰あさ月れあざそと思やら
れていめ様洗所よやもちひど
雲の月を詠やと思ふ歌

あき成様へ行くを行ぐ
い見い都の者ふくいが初て洗所
よ参りていお詣をいづくよ住
人ぞ是い洗ちおれ里よ住者
みくいがきよいの名よれ私のあるがを
ぞを高く月のるれば照よ天
の底陰あさ空方の氣色ぶた

と霄の月の面白かりしを覚ゆ　拾遺

ちらまの人よてまちひろや拾

古へ姨捨の荘園いづくの辺そいそ

をびもて山乃ありさ迄と問き迄ふ心

山乃我心慰めうねつちらまや姨

童山よてる月を乃んでと詠きを人の

跡ありべ昔よ事ふき桂の木の陰社

音乃姨童ゑ昔あき迄ふ人とよ

墨ぬ拾ふの陰ふて捨とうれなる人

乃流れ　昔ま去中よ堰草ぶり成

世らてしろや　墨ぬ昔語よ加り人の

おと牧ぬや物ありきを　なきあと迄

を仕と小流　墨ぬ　おもさ哭きこ乃

原れ　風もそよ　秋ぬ乃ろ

上弦月

ゆうぐれもなぐちかうねつ
ゆうぐれもなぐちかうねつ
あやぐぐどなもそ山乃ゆ雲よ
うつうきまじ家乃ぐどりも
て秋つ乃ちやもじうつ山
霧もうちわ雲つさ
てちひしきの氣多うれ
接へいぐくより来を鈴ぐ

十月

けきばるもやごとく都の去みて
ゆぐ実科乃月を家及始く洗所よ
来りてんよ 初ハ新乃人みてまう
まひうやぐあつうばわうりも月と去よ
影きもく接へ使徒を厨めや
べしすきやお徒をなぐさめんこ
ぐうハめるゆ人やうを 城を秋ハ

愛科の者　罕上

世に栖といふは洗山の詞

世をいとふ人の心は

うらやましく昔人も捨られてはべり

とり洗山よりも毎月の秋毎に

捨の間を青ちりんとて雪あられ

出るとは陰の本の本よりきけ

もやうよりきよきうらく　罕上

夕りぎ

るる月の場のうくだやは生そめて面白

や萬里の雲も陰なくていづの秋

も隔なさ心もすそ袖もひぢこ

五庵中の新月の色ことの外の

古人のこころ　蓋面白のわうや

ばう面白の抑うやはやまの秋の事

もるべしと雲れ月の行きのこ
いかさまきたるよ秋待うねてうぐひ
きさぞうとそらう月のうちだもだ
ぼしぬるよ陰もあさい姨捨山の秋の
月ぞよ堪へ心とやあ昔とだもも思ふ
ぞや　みぎやおもや変らる月
のおよ自哀れせ人形まぎ行よ夢う

現う覚束お　若夢といおどやタ雲
よ形れ出り者の海だづ　あづ組
まうたり　行とつ流んだ本
ようあも姨捨の　山な者ぬ仕
あ乃　昔よ海る秋のよれ　月の故
へまとおて　ぬよを去き　花よ
起所独の露乃　ちを色を乃夜

遊の人よりて
上京門ここうのそうまるや
感ゆきたらぬ命花乃ツ
ちほうわくびて
みをたらでよ姨
更科の月よりひるも取りや
行くすも見れ世の中いつ思そ
ぶ苔ぶよめて月よりうて遊び

名月や聞よひうわて
あるもびうれわりと
の色れ乳色ハ
ぶくいあまど更科や姨捨山の雲
あさ一輪そる清光の最間と
て海面をあ
誓ひ行き勝芳

名月や諸仏の
世の悲

秋書きのうきぞ浮世光明よりぞくべき

色は去りよりこの世西よりかうが宮遊して

西方よりぞめいきんが為とうや月かは

此衆の右の脇仏とうやとうてう縁とすよ

導きぞ有さい罪をかろんぞる天よれ

力をうるべき故よ天勢至とい号すとか

天冠の間よ花のうえりかやぎぐあの

臺の物よ他方の浄土を彫り珠

樓の風の音糸竹のまろへ玉ぞよ

ひろかもあらぐもちろそよ咲まで

ぬ寶の世の鳥ぬ鳥ぬ鳥ぬやあこ来の

花ちりて芳芳きりよ乱きろ

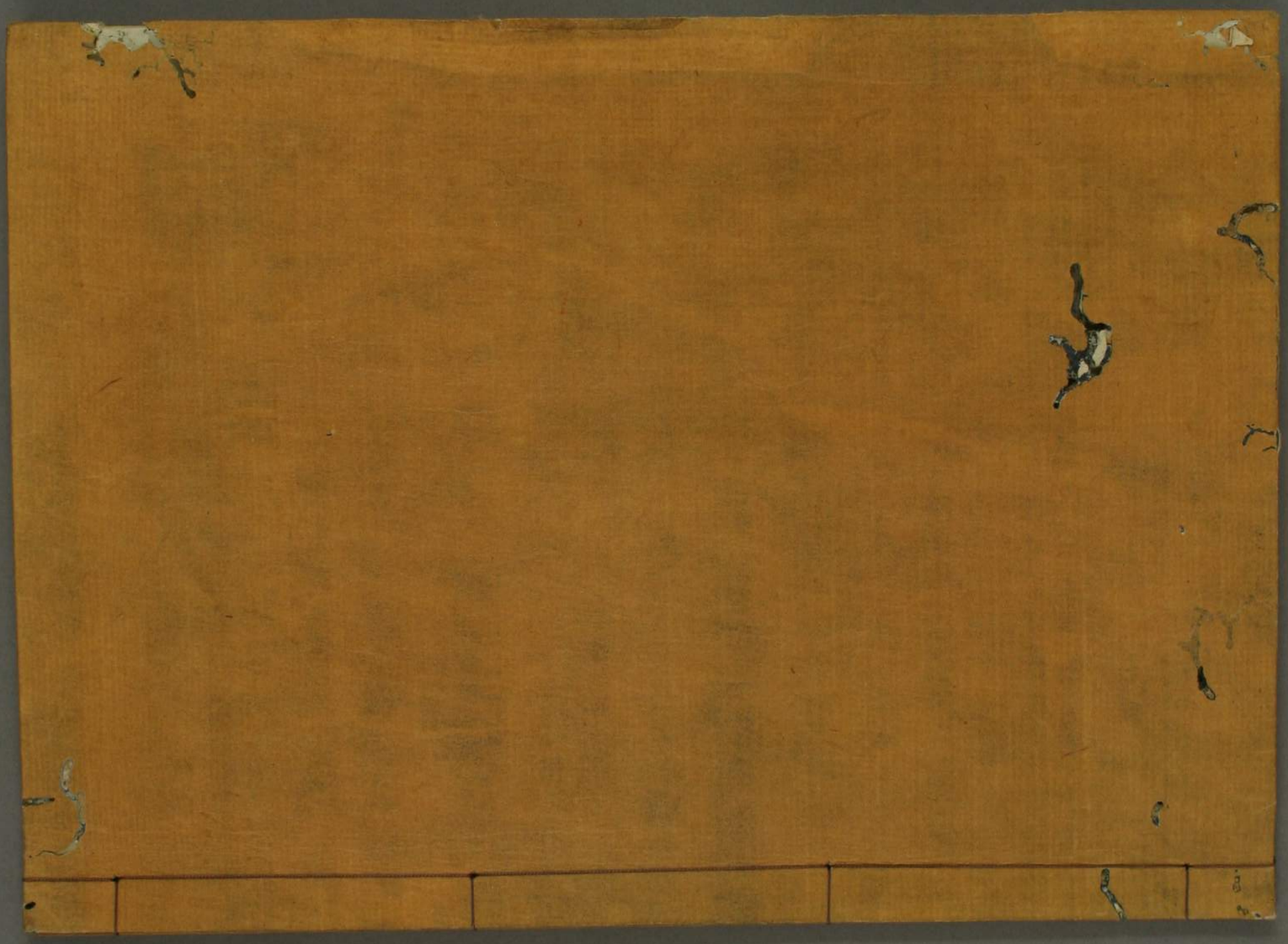
上ミテ

つかれ袁頻伽のたぐ

やうば迦陵頻伽のたぐ

てそろともよ蒼鶏鶏の同じ

囀る鳥の声も聞きもとし
あへて至らぬ隈もなし あまねければ無辺光と見え
とは名付けたり然れども月の光の付は
かりぎみちよ有時はうきかくる有為
方便の世中の定めの名をとゞめ也
昔恋しき夜遊のそで 我心
なぐさめかねつさらしなや 姨捨山

に照る月もとなてく 月に馴れ花
にたはぶるる秋草の露のまよ露の
まよおかしく何しに顕はれて胡蝶の
あそび たはぶれまひし袖を
かへせやかへせ 昔の秋を思ひ出づる
妄執の心やる方もなき今宵の
秋風身にしみじみと恋しきはむかし

ぞうもくハ簡浮の秋よりと界
上元
をれば長も脱さうと早あさ海
トアイヤアアイ上位
みもゆきバ秋ハ
アイ安上
ゆくよ
イトヤハ
あらめ入うもをきて
ニアイイニ
あよそうをびすて
イイイ